

● 視点アジア



コーヒーショップ開店を控え、研修を受ける店員たち＝4日、タイ・バンコク

[分かち合う世界へ]39、山岳民族とカフェ開店アジア自立支援機構代表理事・小沼廣幸

2021/02/07 16:49

私の知り合いの中には逆境にすこぶる強い人たちがいる。苦難を逆手にそれをうまく活用して商売に成功した人や、困っている人々のニーズをいち早く察知してビジネスに結び付けた人たち。人助けと自分のビジネスの繁栄の双方に貢献できれば理想的だ。私にはそんな才覚はないが、世の中が窮地に陥った状態の時にめげることなく、むしろそれをバネに強く生きようとする姿勢に共感を覚える。

私が代表を務めるアジア自立支援機構(GIAPSA)はSDGs(持続可能な開発目標)達成に向け、東南アジアで取り残された貧困層の代表格である少数山岳民族に援助の照準を合わせた取り組みをしている。

その一つに、3年ほど前に始めた、タイ北部を主体とする山岳民族の自助努力による持続可能な収入確保や、生活改善に対する支援事業がある。モデルとして選んだチェンライ県のアカ族の村、メーチャンタイ村では、村を挙げての村落共同事業組合の設立や、焙煎(ばいせん)機の設置を含むコーヒー豆の共同加工場の建設と運営開始までを終え、支援は昨年一段落した。

ところが、今度は焙煎したコーヒー豆の販売ルートの確保が大きな課題として立ち上がった。どこかにコーヒー直売の実店舗を設置して「メーチャンタイコーヒー」の宣伝と販売、ブランド化促進の足掛かりを形成することが必要になった。

標高1500メートルの高地で生産され、手で摘み取られるこの地域のアラビカコーヒーは、専門家の中では高品質のコーヒー豆として知られている。タイの2020年度全国品評会では3位に入賞した。だが実際には、仲買人に安く買い取られたり他地域の豆と混合されたりして、一般に「メーチャンタイコーヒー」の名前を知る人はごくわずかだ。

メーチャンタイ村共同事業組合と何度も協議を重ね、外部からの事業支援者たちの賛同や協力も得て、同組合とGIAPSAの共同事業として今月半ば、バンコクに「アカメーチャンタイコーヒーショップ」を開店する運びになった。場所は経済の中心地域、サトーン通りの中心的なビジネスビルの中だ。

ソーシャルビジネス(社会貢献事業)として、収益の半分は同村の経済、環境保全、社会福祉事業のために寄贈され、残り半分はGIAPSAを通じてタイの食品ロス撲滅や貧困・格差解消、環境保護事業などへの支援に充てられる。

通常ならば首都の中心地に店を開くのは至難の業なのだが、新型コロナウイルス禍で閉店する店や職を失う人が多く、立地条件の良い店と経験豊富な従業員を確保することができた。

感染禍が今後どれだけ続くのか、どのように終息するのか現時点で予測するのは難しいが、1年後2年後に事業が軌道に乗ることを目指している。コーヒー店の経営はもちろん、商売そのものの経験のない私には全てが勉強でチャレンジだが、新しく学ぶことがたくさんあり、他の仕事とのバランスを取りながら、充実した毎日を過ごしている。

<こぬま・ひろゆき> 1953年、東京都生まれ。明治大卒。筑波大大学院博士課程前期修了。博士(農学)。元国連食糧農業機関(FAO)事務局長補兼アジア太平洋局長。2017年にタイ王冠勲章を受章。18年、一般社団法人(非営利)アジア自立支援機構を設立。両親、妻は本県出身。茨城県、バンコク在住。